ろ

2020年度　明治大学

【文　学　部】

解答時間　　60分

配点　　100点

国　語　問　題

はじめに、これを読むこと。

1 この問題用紙は十四ページある。

2 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。

3 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。

4 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。

5 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。

6 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。

7 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。

8 問題に指定された数より多くマークしないこと。

9 **解答用紙は、持ち帰らないこと。**

10 この問題用紙は、必ず持ち帰ること。

11 試験時間は、六十分である。

12 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

（マークの記入例）

良い例	悪　い　例
●	◎　⊗　○

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（本文の表記を改めた箇所がある）

自分の仕事と世の中とのつながりについては私は割に気楽な考え方をしている。私は来世とかレイコン(ア)の不滅は信じないが、一人の人間のこの世でした精神活動はその人の死と共に直ちに消え失せるものではなく、期間の長短は様々であろうが、あとに伝わり、ある働きをするものだという事を信じている。簡単な一例として、私は四十五年前に亡くなった祖父を憶う時、私の心の中に祖父の精神の甦るのを感ずる。こういう意味で、すぐれた人間、例えば、釈迦、孔子、キリスト、というような人たちの生きていた時の精神活動が弟子たちによって一つの形を与えられると、それは殆ど不滅といっていい位に伝わり、働きをする。

創作の仕事も、少し理想的ないい方になるが、作家のその時の精神活動が作品に刻み込まれて行くという意味で、その人の精神が後に伝わる可能性の多い仕事だと思っている。完成した時、作家はそれを自分の手から離してやる。あとは作品自身で、読者と直接交渉を持ち、色々な働きをしてくれる。それは想いがけない所で、思いがけない人によき働きをする事があり、私はそれをのちに知って、喜びを感じた経験をいくつか持っている。それ故、作家は善意をもって、精一杯の仕事をし、それから先はその作品が持つ力だけの働きをしてくれるものだという事を信じていればいいのである。

自分の仕事と世の中とのつながりについては私は以上のように単純に考え、安心している。(A)

「この時代の人間は大変な時代遅れな人間なのだ」私はこんな事を考えた。今の時代では色々なものが非常な進み方をしている。進み過ぎて手に負えず、どうしていいか分からずにいる。思想の対立がそれであり、科学の進歩がそれである。科学の進歩に対しては何か一つファインプレーがあると吾々は何も分らずに拍手喝采をおくる。例えば或る長距離の無着陸飛行に成功したという記事を読むと、新記録好きの今の人々は直ぐ拍手喝采をするが、一体、この事が吾々庶民にとってどういう事を意味するかといえば爆撃を受ける時の危険率が増したという事以外の何ものでもないのだ。そういう能率のいい飛行機で愉快な(B)

旅をするなどいう事はまずないといっていい。それを喝采して喜ぶというのはおかしな事だ。

人間が新記録を喜ぶ心理は人間の能力がここまで達したという事を喜ぶ心理で、これがために人間は進歩したのであるが、今となっては、それも「過ぎたるは［　I　］、及ばざるがごとし」で、何事もあれよあれよで手がつけられずにいる有様だ。この事が予見出来ず、これまでに手綱[a]がつけられなかったというのはいかにも智慧のない話である。今の人が時代遅れだというのはそういう意味からである。

デモクラシイがいいか、マルキシズムがいいか、どっちなのであろう。両方いいものならば、それがかくも対立して、世界を今日のような不安に陥[b]れるはずはないし、どっちかがよく、どっちかが悪いものなら、思想とし、政治形態とし、今日までに優劣をはっきり決めて置けばよかった。素朴過ぎる考え方かも知れないが、私はそんな風に思う。これは思想家、政治家たちの怠慢だったと思う。そして今のように結局、対立の解決を武力に求めるというのでは、思想も政治もなく、最初から腕力で争う動物の喧嘩と何ら選ぶところはないというわけだ。第二次世界大戦中から、この次は米国の民主主義とロシアの共産主義の対立になり、第三次世界大戦になるだろうと、よく人がいっていたが、それだけ分っていて、どうして今までに何もしなかったのだろうか。思想家、政治家、宗教家、学者たちの怠慢といえるように思う。

科学については科学の限界を予め決めて置いて、それを超えない範囲で進歩さしてもらうというわけには行かないものか。大体、こういう考え方は学問、芸術の世界では承認出来難い考えで、愉快な考えではないが、科学の場合だけは限界を無視し、無闇に進歩されては大変な事になると思う。そして、その限界は地球という事になると思う。人間はこの地球から一歩も外に出られないものだからである。

私は若い頃、アナトール・フランスの「エピキュラスの園」の一節で、この地球が熱を失い、最後に残った一人の人間が、何万、何十万年の努力によって築き上げられた人間の文化をその下に封じ込めてしまった氷河の上で、最後の一人が光の鈍った赤い太陽を眺め、何を考えるという事もなしに息をひきとる、これが最後の人間の絶えた時だというような事があるのを読ん

で、反抗するような気持で、それは地球の運命であって、必ずしも人類の運命ではないと思った事がある。吾々は人類にそういう時期、即ちこの地球が我々の進歩発達に条件が不適当になる前に、出来るだけの発達を遂げて、地球の運命から自分たちの運命を切り離すべきだと思った。これは大変便利な考え方で、この考えをもってすれば、大概の現象は割りきれた。究極にそういう目的があるのだと思うと、いかなる病的な現象も肯定出来るのである。そういう［　Ⅱ　］の変則な現われだと思う事が出来るから、総てが割りきれた。飛行機の無制限な発達も、原子力も(その頃はこんなものはなかったが)総て讃美する事が出来るわけである。私は三十二、三歳まではそういう空想に捕われ、滅茶苦茶に興奮する事がよくあったが、どうかすると急に深い谷へ逆落としに落とされたほどに不安(イ)**ショウリョ**を感じる事がよくあった。私はそれに堪え兼ね、東洋の古美術に親しむ事、自然に親しむ事、動植物に接近し親しむ事などで、少しずつそれを調整して行くうち、いつか、前の考えから離れ、段々にその丁度反対の所に到達し、ようやく心の落ちつきを得る事が出来た。以来三十何年、その考えは殆ど変わらずに続いている。

それはさて置き、私は科学の知識は皆無といっていい者だが、自然物を身近く感ずる点では普通人以上であるという自信があり、(ウ)**オク**面もなく、こういう事を書くのであるが、今の科学は段々地球からはみ出して来たような感じがして私は不安を感ずるのである。第一に吾々がそれから一歩も出る事の出来ない地球そのものが段々小さくなって行く事が心細い。遠からず、日帰りで地球を一周する事が出来るようになるだろう。これはまことに淋しい事である。人間以外の動物でそんな事をしたいと思ったり、しようとする動物は一つもない。しかも、人間にそういう事が出来るようになって、どういういい事があるのか。考えられるのは悪い事ばかりである。(C)おのれの分を知るというのは個人の場合だけの事ではない。人間のこの思い上りは必ず自然から罰せられる。既に人間はその罰を受けつつあるのだ。私にはそう思える。人間がいくら偉くなったとしても要するにこの地球上に生じた動物の一つだということは間違いのない事だ。他の動物を遥かに引き離して、ここまで進歩した事には感心もするが、時に自らを省みて、明らかに自身が動物出身である事をまざまざと感じさせられる場合もあるのだ。

最近、私は庭で親指の腹ほどのガマ蛙を見つけて、硝子の花器に入れて飼って見たが、ガマは逃れたいと思うのか、花器の

側面につかまって、のび上るようにしてよく立っている。その恰好がまだ歩けない赤児のつかまり立ちにそっくりなのだ。しかも、赤児がやるように、それで横歩きをする。腰から下に、膝があり、すねがあり、踵があり、足のひらがある。ひろげた手には肘があり、掌があり、指がある、異なるところは首が人間のようにくびれていないだけである。

動物の世界も強食弱肉で、生存競争はなかなか烈しいが、何かその間に調和みたようなものも感じられ、人間の戦争ほど残忍な感じがしない。つまりそれは［　Ⅲ　］内の事だからかも知れない。人間同士の今日の殺し合いは［　Ⅲ　］の外である。

人間は動物出身でありながら、よくぞ、これまで進歩したものだという事は驚嘆に値するが、限界を知らぬという事が人間の盲点となって、自らを亡ぼすようになるのではないか。総ての動物中、とび離れて賢い動物でありながら、結果からいうと、一番馬鹿な動物だったという事になるのではないかという気がする。今の世界は思想的にも科学的にも、上げも下げもならぬ状態になっている。D 他の動物にはなく、人間だけがそれを作った、思想とか科学というものが、最早、人間にとって「マンモスの牙」になってしまったように思われるが、どういうものであろうか。

（志賀直哉「閑人妄語」より）

注　アナトール・フランス　――　一八四四～一九二四。フランスの詩人、小説家、批評家。

問一　傍線ア「**レイコン**」、傍線イ「**ショウリョ**」、傍線ウ「**オク**」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二　傍線a「**手綱**」、傍線b「**陥れる**」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三　傍線A「以上のように単純に考え、安心している」とあるが、なぜ「安心」できるのか。それを説明したものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 一人の人間のこの世でした精神活動は、その長短は様々であろうが、あとに伝わり、色々な働きをして、その精神が甦るから。

② 一人の人間のこの世でした精神活動は、その長短は様々であろうが、殆ど不滅といっていい位に伝わり、その精神が甦るから。

③ 作家のその時の精神活動はその作品に刻み込まれ、読者と直接に交渉を持ち、よき働きをしてくれると信じていればいいから。

④ 作家のその時の精神活動はその作品に刻み込まれ、読者には直接その作品が持つ力以上の働きをしてくれるものと信じるから。

問四　傍線B「大変な時代遅れな人間」とあるが、なぜこのように言えるのか。それを説明したものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 今の時代は思想の対立にあるが、それに伴って科学の進歩で競い合い、かえってそのことで喜び合えない状況を作っているから。

② 今の時代は思想の対立はあるが、科学の進歩で克服できると考えていて、かえって不愉快な状況にあるとは気づいていないから。

③ 科学の進歩は際限がなく、新記録に拍手喝采しているのはいいとして、新記録に喜びを感じられなくなるという矛盾を抱くから。

④ 科学の進歩は際限がなく、新記録に拍手喝采しているうちに、制御できない状況を生じさせている矛盾に気がついていないから。

問五　空欄 Ⅰ にあてはまるものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① ただ　② なお　③ また　④ やや

問六　空欄 Ⅱ にあてはまるものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 地球の発展　② 人類の発展　③ 地球の意志　④ 人類の意志

問七　傍線C「おのれの分」とあるが、それに置き換えられる内容を具体的に表したものとして、最も適切な箇所を本文中から十一字で抜き出して記せ。

問八　空欄 Ⅲ にあてはまるものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 科学の法則　② 自然の法則　③ 思想の法則　④ 地球の法則

問九　傍線D「他の動物にはなく、人間だけがそれを作った、思想とか科学というものが、最早、人間にとって「マンモスの牙」になってしまったように思われるが、どういうものであろうか」とあるが、筆者が主張していることとして、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 科学の無制限な進歩は地球を段々小さく狭くし、そのため人間はますます忙しくなる。思想の対立は他の動物にはないもので、戦争に発展する不安要素を多分に持っている。

② 科学の進歩には限界があるということは、学問の世界では承認出来難く、常に進歩、発展を目指すべきである。思想には様々なものがあってよく、様々な思想は不滅である。

③ 科学の無制限な進歩は地球の破壊をもたらすもので、制限を設けるべきである。思想や政治は他の動物にはないもので、いまや戦争による人類滅亡の不安をもたらしている。

④ 科学の進歩に限界がないことは、学問の世界では承認出来ることであり、人類の幸福につながるものである。思想には様々なものがあるが、特定の思想で統一すべきである。

問十　志賀直哉の代表作を次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 雪国　② 暗夜行路　③ 夜明け前　④ 細雪

二

次の文章は、江戸時代中後期の歌人、国学者の村田春海による歌文集『琴後集』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。（一部本文を改めた箇所がある）

おもふ友がき多かる中に、うつせみの世をのがれ出でて、ちまたの塵の跡たえたるかたには、たれもまづ吉田のぬしをなむ、世にこよなきものにしも、常に言ひあへりける。そもそもこのぬしの住むなるかたは、A月影のすみだ川よりは西、しぐれ行く上野の岡よりは北なりけり。ここをしも金杉の里とぞ言ふなる。これやこの橘の蔭踏む市の大路にも遠く、また杣木きるみ山の奥のたぐひならねば、我も人も往きかひつつ、浮雲の常なき世のさがをも忘れ、塵ひぢのけがしき心のならはしをも、おもひ晴らすべきすみかになむありける。さるは花にとひ月にならせし園生のうち、［　Ⅰ　］たつ気配1いかに見所ありなむとて、まうともむらじも、おなじ心にあひいざなひてぞ訪ひ来める。をりしも時しりがほなる空の気配、晴れみ曇りみ定めなきに、a昨日の秋の紅葉は軒の露にあらそひて夕風にみだれ、［　Ⅱ　］かたまけたる花の光は、なほまがきの霜をしのぎて入日になむにほひける。かくて人々苔をむしろにおり居て、古をしのび、今を語らふほどに、Bあるじの言ひけらく、bわがみかどにこの菊をめづることは、たひらの宮の始めに起こりてよりこなた、Cこの雲居のはしをのぼりては、天つ星かと疑ひ、山路の露を分けては、千年ふる思ひをなしけるたぐひ、ふるごとのためし世々に多かめれど、さるはおのがどちの思ふべきことならねば、2さらにも言はじ、ただ千種の花の後にひらきて、過ぎにし［　Ⅲ　］のなごりをとどめ、かつは世をのがれたる人の操になずらふべき花にcしあれば、朝にけにあかずあひ見む友となすべきは、この花にしくものなむあらざりけらしとあれば、人々このことを喜ぼひて、根さへ枯れめや、年ごとにまたかくてこそあひ語らはめとて、とりどりにdうそぶき出でたり。

おほかたの秋におくるる菊の花なれもうき世をのがれてや咲く

注　吉田のぬし　――　筆者の友人、吉田桃樹（雨岡）か。
園生　――　庭園。
まうともむらじも　――　真人も連も。真人・連は古代の日本で氏族の格を示す称号。ここは誰もかれもの意。
たひらの宮　――　平安朝。
喜ぼひて　――　すっかり喜んで。

問一　傍線1・2を口語訳せよ。
1　いかに見所ありなむ
2　さらにも言はじ

問二　波線「おもひ晴らすべきすみかに」の「に」と同じ文法的性質をもつものを、傍線a～dの「に」の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。
①　a　定めなきに
②　b　わがみかどに
③　c　なずらふべき花に
④　d　とりどりに

問三　空欄 Ⅰ Ⅱ Ⅲ にあてはまる季節の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① Ⅰ 秋　Ⅱ 冬　Ⅲ 秋
② Ⅰ 秋　Ⅱ 秋　Ⅲ 冬
③ Ⅰ 冬　Ⅱ 秋　Ⅲ 冬
④ Ⅰ 冬　Ⅱ 冬　Ⅲ 秋

問四　傍線A「月影のすみだ川」は和歌の修辞法を応用したものであるが、その修辞法の名称として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 掛詞　② 序詞　③ 艶詞　④ 枕詞

問五　傍線B「あるじの言ひけらく」とあるが、あるじの言葉はどこまでか。終わりの五文字(句読点は含まない)を抜き出して記せ。

問六　傍線C「雲居のはしをのぼりては、天つ星かと疑ひ」は、「久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける」（『古今和歌集』秋下、藤原敏行）をふまえた表現である。傍線Cはどのような趣旨を表現したものか。最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 美しい雲がたなびいている先を眺めているうちに夜になり、空にきらめく星が菊の花のように感じられた。
② 階段のような形をした雲が空のはるか高くに向かって掛かり、天上の星は菊の花が咲いているかのようだ。
③ 天皇の御所のきざはしを昇っていくと菊の花はみごとに咲きほこり、天空に広がる星と見まごうばかりだ。
④ 菊の花が咲いている宮中へと続く道を時間をかけて歩いていくと、まるで夢のような星空が広がっていた。

問七　文章末尾の和歌の説明として、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 金杉の里で夕日を受けて咲き誇る菊の花を、秋の盛りにふさわしいものとして賞美している。
② 吉田邸に集まった人々が、来年も菊の花見で再会することを誓いその時期を歌にして吟じた。
③ 人々が歌を吟じているのを承け、筆者は眼前の菊の花に吉田氏の生き方を重ねて尋ねかけた。
④ この庭のあるじが、自ら菊の花に対して抱く思いを、自身の人生観に重ねて歌いあげている。

問八　『古今和歌集』の成立に最も近い時期に書かれた日記を次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 和泉式部日記　② 更級日記　③ 土佐日記　④ 紫式部日記

三

次の文章は、江戸時代後期の儒学者、漢詩人である広瀬淡窓の「李白の像に題す」である。これを読んで、後の問に答えよ。

（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）

太白喜縦横之術、有志功名、而不能成、終佚蕩詩酒。豈屑為詩人者乎。A 然其実未必有経世之才、不如為詩聖以表百世也。唯其不屑為詩人、其詩所以高也。a 子美亦然、志期稷契矣。b 近人作詩、多供世俗之玩。論其地位、不過与俳諧師・茶博士同伍。B 是不能為詩人者也。乃欲以雕章絵句之巧追蹤二子、難矣哉。

（『淡窓小品』より）

注　太白　――　盛唐の詩人、李白の字。
縦横之術　――　合従連衡のように、諸国を説いて連合させる外交術。
佚蕩　――　だらしないさま。
経世　――　世の中を治める。
詩聖　――　ふつう杜甫を指すが、ここでは詩の名人。
子美　――　盛唐の詩人、杜甫の字。
稷契　――　稷と契。伝説上の聖王に使えた名臣。
俳諧師・茶博士　――　俳諧・茶の湯の宗匠。
雕章絵句　――　美しく飾り立てた文章。

問一　傍線a「不如」・b「所以」の読みとして、それぞれ適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

① いはれ　② ゆゑん　③ ため　④ およばざる
⑤ ごとくせざる　⑥ しかざる　⑦ ゆかざる

問二　傍線A「豈屑為詩人者乎」を、口語訳せよ。

問三　傍線Bを書き下し文にすると、「俳諧師・茶博士と伍を同じくするに過ぎず」となる。これをふまえて、「過」と「同」の部分に返り点を付けよ。（送り仮名は不要である）

問四　本文中で**異なる存在**として示されているのはどれか。次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

①　近　人　　②　俳諧師　　③　不能為詩人者　　④　二　子

問五　本文の内容に合致するものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

①　李白や杜甫には詩作より高い目標があったから、優れた詩を作ることができたのだろう。

②　李白や杜甫には世を治める才能もあったから、詩の名人として高く評価されたのだろう。

③　当世の詩人は、宗匠に俳句や茶の湯を習うだけでなく、世俗を意識すれば高く評価されるだろう。

④　当世の詩人は、李白や杜甫の装飾的な文章を理想とすれば、優れた詩を作ることができるだろう。